

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

—— 諸職との連携をめぐって ——

小島 孝夫

はじめに

埼玉県北部に位置する行田市は県北における中核都市の一つで、近世期から江戸を中心とした政治経済に密接に関わってきた地域である。また、同市域では明治時代から昭和三〇年代まで足袋製造が盛んに行われており、行田の足袋製造業は埼玉県を代表する地場産業として知られていた。現在、市域で足袋製造を行う事業所は減少し、家内工業的に生産を続けている事業所が多くを占めており、足袋製造に従事する従業員の高齢化もすすんでいる。

もともとは農家などの内職として行われていた足袋製造が、近代化が進展する過程で、地場産業として展開していった背景には一体どのような事由があったのだろうか。

明治時代以後に足袋という商品が庶民の間に普及したことで、市域における主要産業として成長し、第二次世界大戦後の生活習慣の急速な変化にもない足袋の需要が減少し、足袋製造産業が衰微したと捉えるのは容易であるが、行田市域を、足袋産業を形成した「小さな世界」として捉えてみたとき、わずか百年ほどの間にも足袋製造に関わった人びとのさまざまな営みがあったことも事実である。その際に足袋製造は核となった足袋製作集団やその技術だけで成り立ったものではなく、それらのそれぞれに関わるさまざまな職種や職人によっても支えられてきたことにも留意しなければならない。

小稿では、行田市域での足袋製造業に関わった方たちからの聞き書きをもとに、当時の足袋製造業の成り立ちと移り変わりを明らかにしていきたい。また、それらの過程で、周縁の諸職や職人たちがどのような対応を取っていたのかという点にも注目し、従来の民俗学的調査ではあまり省みられることのないような諸職間の有機的關係についても言及していくことにしたい。

一 行田市における足袋生産の概要

小稿で事例とする行田市域における足袋産業は、明治時代から大正時代そして第二次世界大戦後までの間に、近世期以来の足袋生産地であった旧忍町(行田市忍町)を中心としてその周縁の地域や人びとによって経済的に相互に支えられたものであった。¹⁾

埼玉県北部に位置する旧北埼玉郡一帯では、明治時代中期頃まで綿花が盛んに栽培されており、これらを原料とした綿織物が生産されていた。この地域で産する綿織物は、この地域一帯から産する藍によって染色された糸で織造されるため、「青縞」と呼ばれた。この青縞を原材料として、江戸時代末期頃から行田地域の農家の内職として足袋製作が行われるようになったといわれている。中仙道の宿場であった熊谷宿での需要が背景にあったものと考えられる。

明治時代に入りそれまでの身分制度が崩壊したことなどから、日常生活における足袋の使用が一般の人びとにも普及し、足袋生産は旧忍町を中心地として産業化していくことになった。製造面では、生産の一部にしか携わらない「足袋製造卸」、足袋を全面的に委託生産する「足袋問屋」、これらから足袋生産を委託される「下職」、さらに「下職」から生産を請け負う「内職」という職種による階層的関係が形成され、これらの関係を強固にしていくために足袋の製造工程自体も分業を前提とするようになっていった。明治二七（一八九四）年に手動ミシンや裁断機などの機械が当時の主要な足袋工場に導入されると、これらの機械を効率よく運用するために、製造工程の分業がさらにすすめられた。地域内での分業システムが確立する過程で、「足袋製造卸」は自家工場の拡大をすすめ、資本を蓄積した「足袋問屋」のなかには自家工場を建設する者も現れた。

さらに、明治四三（一九一〇）年には行田電燈会社が設立され、地域内への電力供給が可能になると、動力ミシンが導入されるようになり、行田地域での足袋製造は家庭内手工業から工場での機械工業へと

転換していくことになった。こうした設備の近代化とそれにもなう製造工程の分業化の定着とにより、大正時代には足袋の生産量は大幅に増加していった。明治後期から大正初年にかけて、行田足袋同業組合に加盟する組合員数は百名に達し、八つの電動力使用工場および約百五十台の裁断機と千六百台以上のミシンが稼動するなど、工業化をとめないながら生産額が順調に増加していった。²⁾一方で、動力による工業化の進展は、足袋製造業者間の階層分化をもたらし、組合員数の約一割にあたる十二名が年間生産量五十万足以上の有力業者に成長し、そのなかで百万足以上を生産する足袋製造業者も四つを数えた。³⁾

当時の行田足袋の販路は、当初は東京の足袋問屋を中心としたものであったが、各業者の生産量が増大し足袋問屋への競争が顕在化すると、各足袋製造卸業者は独自に関東以北の衣料品小売店を対象に販路拡大を図っていくようになった。東北・北海道をはじめ、北関東・中部・北陸地方に、各足袋屋が店員を派遣して販路を開拓させ、通信販売によって東北市場などの小売業者へ製品を販売していった。大正中期には関西方面へも販路が広がっていった。価格低廉な地方市場に販路が広がっていった一方で、行田産の足袋の下等品の中には布地の質や耐久性・染色などの品質面に問題があり、他産地との競争が激しい並品以下の商品生産管理の課題が顕在化していった。また、行田足袋業界の課題として、白足袋用の漂白技術の改善も急務となり、関連業界の忍晒業組合と連携して、足袋の高級化やファッション化に対応していった。

大正十二(一九二三)年当時の行田の足袋問屋・足袋製造卸は合わせて一七六軒あり、その従業者数は内職者を含めて四、八八八名にのぼっている。加えて、市場の拡大にともない、足袋の素材も多様化し、従来の青縞と白木綿に加えてキャラコ・別珍・コール天・縞子などが用いられるようになり、原料の取引先は近隣の業者から東京などの業者へと転換し、製品の販路も急速に拡大していった。⁴⁾こうした足袋生地が多様化にともない、それまで青縞の製造と販売を行っていた羽生や加須の青縞買継問屋のなかから、行田に做う形で足袋問屋や足袋製造卸に転業する業者も現れ、旧忍町を核とした足袋製造地域が拡大していった。

昭和時代になっても行田足袋の生産量は増加し続けたため、足袋業界全体の統制を図るため、製品・材料・設備等の検査取締りや原材料の共同購入および製品の共同販売、共同施設の運営などを通じて生産・流通両面での業界統制を行うことが模索されるようになった。全国的に不況が深刻化した昭和六年には有力業者が共同して足袋共同販売会社を設立し、関西地方を中心に新たな販路が模索された。また、昭和初年頃から業界内での労使対立が顕在化したため、それを緩和させるために足袋屋対抗の運動会を開催したり、工場音頭や応援歌を導入するなどして、労使間の融和が図られた。昭和八年頃には行田足袋業界は陸軍省から防寒頭巾の大量受注を獲得し、忍町全体が活況を呈したが、一方で他産地や大阪の福助足袋などの大会社との市場競争が激化しており、業界全体が緊張感に包まれていった。こうした折に、業界にとって最大の競争相手であった福助足袋が行田に進出してくることが決し、足袋業界はその

対応に追われることになった。⁵⁾

昭和九（一九三四）年四月には足袋業界内で工業組合設立の準備が急速にすすみ、同年十一月に埼玉県から行田足袋工業組合の設立が認可された。⁶⁾昭和十二年に日中戦争が勃発すると、その影響は足袋産業界にもおよび、軍需物資の製造が加わることで足袋製造業界は十三年には最盛期を迎えた。しかし、日中戦争開戦にともなう戦時統制経済により衣料繊維統制が行われ、その生産量は大幅に減少することになった。

一方で、行田には足袋製造の副業として在来の青綿や白木綿を使った作業用和装品などの生産を行う業者も並存した。これらのなかには、大正十二（一九二三）年の関東大震災以後の衣料品の急速な需要に合わせて、ズボン・シャツ・学生服などの被服を製造するようになった業者もあり、足袋の販路拡大にあわせて次第に販路を拡げ、被服専業となっていたものもあつた。昭和十二年は行田に陸海軍の被服本廠の出張所がおかれ、翌年には軍需工場動員法が施行され、既存の工場は軍の指定工場に統合され、軍服や国民服の生産が行われるようになった。衣料統制下の行田では、衣服の生産が急激に増大していった。同年には行田足袋工業組合は被服部門を業務内容に加え、組合名称を行田足袋被服工業組合に改めることになった。十三年には軍需工場動員法に基づき、有力工場は軍の管理工場や監督工場に指定され、第二次世界大戦が終戦にいたるまで、行田足袋業界は軍需被服の生産に傾斜していくことになった。⁸⁾折りしも、十二年に忍町と隣接する長野村・星河村・持田とが合併し、忍町の足袋産業を中核とした産業

都市構想の素地ができあがり、十五年には吹上駅と忍町とを結ぶ産業道路が完成したこともこうした傾向を一層助長させていくことになった。

終戦を迎え、日本の経済が市場経済に復帰し衣料繊維統制が完全に撤廃されると、行田の足袋生産は再び復興したが、第二次世界大戦後の高度経済成長期の進展にともなうサラリーマン層の出現と洋装の定着、さらに昭和二九年にナイロン靴下が発売され、急速に市場を拡大すると、足袋の需要は高齢者を中心としたものになり、その販路は急速に減少し、昭和三十三年頃を境として足袋業者の廃業や転業がすすんだ。小規模な製造業者のなかには「足袋屋は転ばぬ前にやめる」と廃業する者も多かったが、転業には二つの傾向があり、足袋生産の技術を生かして地下足袋・サンダル・スリッパ・靴下の製造を行うものと、統制下での経験を生かして学生服・作業服・制服といった被服製造業に転じるものとに分かれた。この際に、足袋業界全体で他の産業への転換を図るといふ模索はみられなかった。

二. 足袋製造の技術

足袋産業の核となるのは足袋の生産である。足袋という衣料品が産業の核となっていた背景の一つに、その製作工程が複雑であったために、大量生産を実現するために各工程を分業することで生産の合理化が図られてきたことがあげられる。とくに、電動器械を用いて大量生産を一層すすめようとする場

合には、工程ごとに作業を分担して分業で仕上げていくことが求められた。

足袋の製造工程の多くは手作業で行われるもので、生地の準備から仕上げまで十三段階の工程がある。明治時代以降、これらの工程にそれぞれの作業に応じたミシンなどが導入されるようになり、それらの器械の効率を基準にした各工程の作業の段取りが必要となり、手作業の工程も作業ごとに一定の内容を均質に仕上げていくという方法が一般化されていった。また、こうした分業体制が定着してくると、足袋の一貫生産を行うことができるのはこれらの機器を完備した事業所ということになり、個人で足袋製作にかかわる場合は下請けとして各工程を分担するということになっていった。

製造工程は、(1)ひきのし、(2)裁断、(3)とおし、(4)おさえ、(5)はぎまき、(6)鞆付け、(7)羽縫い、(8)甲縫い、(9)尻止め、(10)ツマ（先付け）、(11)廻し、(12)千鳥、(13)仕上げ、の十三工程に分けられている。足袋製造の特徴を確認するため、それらの作業の詳細をみていくことにする。

- (1) ひきのしは、足袋の生地を裁断しやすくするために、生地を十枚ずつ重ねてそろえる作業で、「貼り屋」と呼ばれた職人が担当した。また、「貼り屋」が用いる白足袋様の晒し木綿の加工は「晒し屋」と呼ばれた職人が担当した。これらの作業は布地の晒し作業や貼り合わせた糊の乾燥のために一定の広さの土地が必要なため、旧忍町近郊の農家の副業として行われた。

- (2) 裁断は、ひきのした生地を金型で打ち抜く作業で、カワと呼ばれる甲の内側・外側の二種類の型と底の型とを十枚ずつ打ち抜いていく。金型は金型職人が製造・調整するもので、足袋製造所

毎に「原稿師」が作製した紙型に合わせた金型がつくられた。また、定期的に金型の刃を付け直す作業も行われた。

以下の作業は布地の裁縫作業で、元来は一人の職人が一貫して行うものであったが、行田市域の場合には、裁縫工程の分業が積極的に行われるようになり、先述した「足袋製造卸」、「足袋問屋」、「下職」、「内職」による、階層的な分業が行われることで、各工程の分業がすすめられた。

さらに各工程に専用のミシンなどの器械類が導入されると、家内工業的な単工程の分業が一層明確になったが、器械の導入により複数の工程を効率化することも可能になったため、自家工場の拡大を図る足袋製造卸や自家工場を建設する足袋問屋もあらわれ、各工程の分業と統合とが同時に模索されるようになった。明治四三（一九一〇）年に行田電燈会社が設立され電力の安定した供給が可能になると、ミシンなどの動力化が可能になり、行田の足袋製造業の主体は工場制機械工業化を前提としたものになった。

- (3) とおしは、甲馳をかける太い糸を表生地に通し縫いをする作業で、かつては手作業であったが専用の機械が開発され、内職にまわされることが多くなった。
- (4) おさえは、通し縫いした太い糸が動かないように止め縫いをする作業である。
- (5) はぎまちは、鞋を付ける部分の裏に当て布を接ぎ合わせる作業である。
- (6) 鞋付けは、鞋を布地に縫い付ける作業で、これもかつては手作業で縫い合わせていたが、専用ミ

シンにより簡便に作業を行うことが可能になった。

(7) 羽縫いは、甲の表と裏を上辺で縫い合わせ、それを表にかえず作業である。

(8) 甲縫いは、甲の部分の内甲と外甲をそれぞれ縫い合わせる作業で、羽縫いと甲縫いにより甲の外形がほぼできあがる。

(9) 尻止めは、外形が完成した甲の部分の踵を丸い形に止め縫いする作業である。

(10) ツマ（先付け）は、甲布の指先部分に小刻みなマチをつける作業のことで、指先のふくらみを作りながら、皮と底とを縫い合わせる作業である。足袋の履き心地を決める最も重要な作業である。

(11) 廻しは、先付けしたところから踵の部分までの表布と底布とを縫い合わせる作業である。

(12) 千鳥は、廻し縫いをした縫い代部分をからみ縫いにする作業で、この工程までで足袋の裁縫作業は完了する。

(13) 仕上げは、縫いあがった足袋を木型に被せて、木槌で叩いて形を整え、アイロンをかけて皺を伸ばす作業で、さらに、足袋を一足ずつ紙で結わえ、商標を付して包装し、箱詰めする。

これらの工程ごとに専用のミシンなどが開発されたことで、行田の足袋製造業は階層的な分業を前提としたものとなり、工場で一定の期間従業員として業務に携わり、結婚などを期に退職した際に、ミシン類を借り受けるなどして、その工場の内職を継続して行うということが地域内で恒常的に行われるようになり、工場単位での作業の階層化もすすんでいったのである。そして、旧忍町を中心とした足袋の

製造空間を取り巻くように、足袋製造や販売に関わるさまざまな関連業種が集積されていった。

三、足袋製作を支えた諸職

行田市域における足袋製造業の展開と足袋製造に関する工程を概観してきたが、足袋の生産という活動が地域社会の紐帯としても機能していたということを確認しておきたい。

現代社会における生産活動の多くは家産を前提としたものではない。イエの安定を支えた家業というなりわいの型はほとんど存在しない。そのために、地域社会の紐帯として共有される事象は希薄となり、その結果として地域社会を形成する人と人とのつながりとして認識できる事象や機会も無くなっている。生活をするために他者の存在を意識しないで済む生活を私たちは日々過ごしていると換言してもよい。足袋生産というなりわいがいかに当時の地域社会を有機的につないでいたのかを、先述した足袋の製造工程に沿ってみていくことにする。

第二次世界大戦が終結し、昭和二六（一九五二）年に衣料繊維統制が完全に撤廃されると行田の足袋製造業はまもなく復興し、昭和二九年当時の足袋製造業者は三〇四社にのぼる。足袋製造業者は核となる商標に加えて、販路や素材の差異により多彩な商品展開を試みており、主要な商標以外に市域全体では二四六の商標が用いられていた。⁹⁾昭和二九年当時の関連業者を示したのが表1である。足袋製造

の関連業者には、ミシン屋（1〜3）、足型屋（4〜8）、抜型屋（9・10）、甲馳屋（11〜13）、原料屋（14〜30）、張屋（31・32）、紺屋（33〜37）、糸屋（38〜40）などの足袋製造に直接関わる業者に加えて、商品の発送に関わる木箱屋（41・42）、ダンボール屋（43・44）、運送業者（57）、商品の広告やラベルの印刷に関わる印刷屋（47〜53）、出版社（54）、印章屋（55・56）、商品の販路を拡大するための交際に用いる食品製造業（58・59）、さらに金融業やさまざまな会合に利用する料亭や旅館まで、実に多様な業種が足袋製造業に関わっていたことがわかる。

また、足袋製造業に関わる業者の大半は、行田市域に集中しており、隣接する熊谷市や羽生市にも関連業者が存在するが、足袋産業が行田市域に特化した産業として展開したことがわかる。

諸職の存在に加えて、農閑余業との関わりについてもふれておかなければならない。

行田の足袋製造業の展開は、歴史的には中仙道の宿場町からの需要、次いで明治維新による身分制度の撤廃などが大きな転機として存在しているが、こうした転機を生み出したのは、利根川・荒川流域に広大に広がる水田などの耕作地の存在であり、農民としての生活に従事していた人びとの存在である。足袋の需要は冬季を中心とした季節的なものであり、農家の人びとが足袋の製造過程に組み込まれていたのは、農閑期に副業としての貼り屋や晒し屋としてであった。冬季の農閑期の余剰労働力と冬季にはニワとして農作物などを干したりしない広大なニワの存在が旧忍町周辺の農家の参画を可能にしたことは間違いないことである。

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

表 1：昭和29年頃の足袋製造業者

(出典：行田足袋商工協同組合編発行『行田地方の足袋被服商標名簿』1954年)

番号	会社名	所在地	業種・商標	代表者
1	有限會社大村ミシン店	行田市大手町	ミシン業	
2	福島ミシン工業株式会社	行田市忍155	ミシン業 (針・部品 卸小売)	
3	有限會社海藤ミシン製作所	行田市下忍	ミシン業 (部品製造)	
4	武田足袋型工場	行田市長野	鉄工所 (足袋型)	
5	金久保鉄工所	行田市谷郷	鉄工所 (型木台・裁断機械)	
6	関口鐵工所	行田市北谷仲町	鉄工所 (足袋被服靴拔型製造)	
7	堀鐵工所	行田市旭町	鉄工所 (足袋型・裁断機製造販売)	
8	株式會社田代鉄工所	行田市	鉄工所 (足袋被服靴型 裁断機械)	
9	株式会社柳瀬鐵工所	行田市北谷	鉄工所 (拔型木台・裁断機械)	
10	有限會社吉永製作所	行田市長野	鉄工所 (足袋被服靴拔型一般)	
11	佐野工業株式会社 (行田出張所)	行田市市役所通り	甲馳屋 (各種甲馳)	(本社 広島市横川駅前)
12	白石産業有限會社	行田市行田駅前	甲馳屋 (各種甲馳製造販売)	
13	東洋甲馳株式会社 (行田出張所)	行田市下町	甲馳屋	
14	駒見商事株式會社	行田市内行田	原料業 (足袋・被服・原料)	社長駒見行道
15	株式會社草竹商店 (行田出張所)	行田市佐間	原料業 (足袋被服原料商)	社長草竹一吉
16	株式会社斎藤茂里商店 山サ印	行田市諏訪町	原料業 (足袋地綿布商)	
17	株式會社村賀商店	行田市天満	原料業 (足袋被服原料商)	
18	新行織維株式会社	行田市佐間	原料業 (足袋被服原料)	社長鶴野吉雄
19	新井恒藏商店 (營業所)	行田市向町	原料業 (足袋被服原料卸)	
20	保泉近藏商店	行田市行田	原料業 (足袋被服原料)	
21	株式會社安田商店	行田市新町通り	原料業 (キャラコ他足袋原料)	
22	株式會社大沼辰之助商店 (行田出張所)	行田市行田	原料業 (足袋・被服地・卸商)	(本社 日本橋大伝馬町)
23	株式會社横田商店 (本社 大阪市)	行田市駒形	原料業 (別珍・コール天)	社長横田靖乃亮
24	株式會社寺田商店 (行田連絡所)	行田市佐間	原料業 (別珍・コール天)	(本社 日本橋大伝馬町)

25	株式会社村賀商店	行田市天満	原料業（足袋被服原料）	
26	株式会社坪田商店		原料業（足袋被服原料）	
27	三澤繊維株式會社 （行田出張所）	行田市下町	原料業（紋羽・ネル・ガラ紡）	社長三沢一男
28	株式會社馬橋商店	行田市新町	原料業（足袋被服原料）	
29	株式會社細谷商店	行田市大手町	原料業（足袋被服原料）	
30	株式會社濱常商店 行田連絡所	行田こま驛前 塚田商店	原料業	
31	埼玉足袋底張工業會	行田市宮本町	張屋（底張加工）	
32	埼玉布晒加工協同組合	行田市佐間	張屋（晒加工）	
33	三八染工場	行田市持田駅前	染色業（染め物各種）	
34	行田染布株式會社	行田市774番地	染色業（別珍コールテン染色整理）	
35	株式會社佐間染工場	行田市佐間、	染色業（染色各種）	社長中澤貞一
36	塚本染工株式會社	行田市大字忍71	染色業（別珍コールテン染色整理）	社長塚本市男
37	株式會社田島染工場	行田市埼玉	染色業（各種染色整理加工）	
38	株式會社社長島糸店	行田市行田	糸屋（カタン糸、縫糸）	
39	儘田産業株式會社 （行田支店）	行田市本町	糸屋（縫糸製造販売）	
40	有限會社吉田釦店 （行田出張所）	行田市旭町	釦屋（釦・縫糸）本社熊谷	
41	有限會社黒淵木工場	行田市旭町2	木工業（特需木箱・一般木箱）	代表黒淵松次郎
42	関根木箱店	行田市長野	木工業（足袋被服用木箱製造）	代表関根政次郎
43	荒木文愛堂	行田市内行田	紙工業（紙器加工・ダンボール）	
44	有限會社栗原洋紙店	行田市向町	紙工業（ダンボール・板紙他）	
45	柿谷清太郎商	行田市忍279	回収業（屑繊維問屋）	
46	株式會社佐藤商店	行田市宮本町	回収業（屑繊維・反毛原料商）	社長佐藤武雄
47	エハラ印刷所	行田市行田	印刷業	
48	共同社	行田市旭町	印刷業（紙器、印刷）	
49	行田紙業印刷有限會社	行田市旭町	印刷業（オフセット・美術印刷）	
50	今津印刷所	行田市新町通り	印刷業（各種印刷・帳簿製造）	
51	有限會社三共社印刷所	行田市大手町	印刷業（オフセット・石版印刷）	
52	株式會社小菅商店	行田市大手町	印刷（足袋被服ペーパー・包装材料）	（本町店）
53	森罝線製本所	行田市新町	印刷（印刷一式・紙・紙器・文具）	
54	足袋被服通信	行田市宮本町	機關紙（足袋被服業界機關紙）	

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

55	富田商店	行田市市役所通り	印章業（印章・ゴム印）	富田孝之
56	五州堂	行田市本町	印章業（印章・ゴム印）	
57	埼玉貨物自動車株式会社	行田市旭町	運送業（近県各地小口扱）	社長安藤秀三
58	福茶屋	行田市本町通り	菓子店（まんじゅう・最中）	
59	山本食品工業株式会社	行田市埼玉	漬物（奈良漬け）	
60	行田市金融團			
61	大澤証券（行田支店）	行田市天満	証券業	
62	武蔵證券株式会社 （行田支店）	行田市佐間旭町	証券業	支店長 堀越一郎
63	武田経理事務所	行田市宮本町	税務会計経営相談	所長武田亨
64	高沢靴店	行田市市役所通り	靴製造販売	
65	廣藝社	行田市行田	広告宣傳一般	黒川忠三郎
66	港屋旅館	行田市宮本町	旅館業	
67	美美荘	行田市長野桜町	旅館業（貸席・宿泊）	
68	有限会社幸樂	行田市桜町	割烹旅館（結婚式場・割烹・浴場）	
69	志な乃	熊谷市弥生町	旅館業	
70	熊谷染布有限公司	熊谷市石原	染色業	
71	松本ミシン工業株式会社	羽生市警察前	ミシン業（各種部分品卸・小売）	
72	増田甲馳工業株式会社	羽生市下手子林	甲馳屋（足袋地下足袋各種甲馳）	
73	古島染工株式会社	羽生市中央	染色業	社長古島隆次
74	小島染織工業株式会社	羽生市神戸	染色業（金橋商標）	社長小島茂樹
75	株式会社酒井染工場	羽生市	染色業（足袋？、被服地染色）	
76	儘田産業株式会社 （行田支店）	羽生市本町	糸屋（維糸製造販売）	
77	有限会社大黒屋商店	羽生市本町	釦屋（維製付属品一式）	
78	強力被服工業株式会社	羽生市羽生町	（学生服・作業服）	
79	根岸庄五郎商店	羽生市羽生	金星足袋（学生服）	
80	株式会社藤間商店	羽生市羽生	文明足袋（足袋・被服）	
81	荒井三吉商店	羽生市羽生	星馬印（布綿・被服）	
82	小島株式会社	羽生市羽生町	勤王印（足袋・学生服）	
83	小林繁夫商店	羽生市羽生町	親子燕（布綿・被服）	
84	高橋工業有限公司	羽生市羽生町	白鳩印（足袋・被服）	

四、足袋製作の展開とその背景

現在、行田市において足袋の專業製造所は海外にも事業所を持つ一事業所しかない。また、足袋製造と被服製造とを併せて行う事業所に加えて、家内工業的な事業者は数多く存在するが、限られた需要に対応する形で営業を続けているという状態である。

したがって、先述したさまざまな業種間のつながりや業種間の仲介役を務めるような存在もすでに存在していない。「朝起きるとミシンの音が聞こえた」とか、婦人たちが内職で小金を稼ぐため「行田のこどもは金持ちだ」というような話は、全くの昔語りになってしまったが、ある地域が一つのなりわいによって統合されていた事例は行田の足袋製造業に限らず数多くみられたはずである。こうした地域を単位とした生産活動の変化は、昭和三〇年代から始まった高度経済成長における産業構造の変化に起因している。昭和三〇年以降の高度経済成長にともなう洋装化の進展と昭和二九年に出現したナイロン靴下とにより、足袋の市場は急速に縮小し、その需要は激減していった。そして、昭和三三年を境として行田の足袋製造業者は廃業や転業を余儀なくされていった。前章でみた諸職に関わった人びとの生活を、足袋の製造工程に沿ってみていくことにする。

(1) 染め屋

行田市域を含む北埼玉地方では農家の副業として綿や藍の生産が盛んで、綿織物を藍で染めた武州藍の生産が行われていた。その主要な産地は現在の羽生市や加須市一帯で、行田の青縞の紺足袋の材料となった藍染の木綿地は近隣の染め屋を介して行田の足袋製造業者にもたらされた。市内にも富田・佐間・塚本・行田に染め屋があった。

(2) 晒し屋

城西の山口家は大正時代から第二次世界大戦後まで親子二代で晒し屋をしていた。足袋の底に用いる布を晒す仕事で、足袋屋が原反を仕入れ、晒し屋が原反を晒して足袋屋に納めた。かつては白木綿を灰に浸して漂白していたが、足袋の増産にあわせて量産しなければならなくなると、原反を苛性ソーダを入れた釜で煮るようになった。煮あげた後に希硫酸に漬け、大量の水で薬剤を洗い流し、さらに晒し粉につけた。作業場は五百坪ほどあり、従業員は四人いた。仙台周辺の若者が何代も年季で来ていた。作業は一年中で、一日あたり二〇〇反ほど仕上げた。第二次世界大戦前には市域に二〇軒ほどの晒し屋があったが、それぞれが納める足袋屋を確定していたので、足袋屋が廃業する際に心中するように廃業していった。山口家は晒し屋を廃業後、スリッパの製造を行い、現在はダンボール製造を行っている。

(3) 貼り屋

貼り屋は市域に四〇軒ほどあったといわれている。その多くが谷郷地区などの農家で、広い敷地を有する家であった。主要な作業は足袋用の布を貼り合わせる作業で、甲用の生地はヌノバリ、底用の布は

ソコバリと呼んだ。生地は厚さによりニイニ・ニイチ・ウンサイと呼びわけられており、布地に合わせて糊の種類も甘藷でんぷん・小麦粉・正麩とを使い分けた。貼り合わせた布は天日で干しあげたが、夏は平干し・冬は高干しというように、干し方にも日照にあわせた季節差があった。貼り屋は足袋製造業者が廃業しても、足袋製造から転業したスリッパ製造業からの需要が続いたため、晒し屋のような急な廃業はみられなかった。むしろ、農業からの転業でスリッパ製造業に転じた貼り屋もあったという。

(4) 金型屋

足袋用の布を打ち抜く金型を製造した。足袋の型は製造業者ごとに異なるので、事業所の型に合わせて金型をつくった。金型の基本型は六種類で、一足の足袋に①四つ型(外側)、②親型(親指側・内側)、③底型、④はぎまち、⑤四つ型の裏、⑥親型の裏という金型を用いる。足のサイズごとに六つの型が必要になるので、製造業者は大量の金型を保有することになった。製造所が減少した現在でも金型は必須で、現在も金久保製鋼などが稼動している。

製造所の紙型をブリキに写し、その型に合わせて金板を火入れしながら曲げて金型をつくり、裁断側を研いで片刃にする。金板はカタウス材で鋼材自体が鋼でできているので定期的に刃先の手入れをすることになるが、一回作ると二〜三回の研ぎ直しをしながら一〇年位使う。昭和二八年頃が金型の注文のピークだった。火入れをしない鉄工所で作った型はヌキガタとも呼ぶ。また、そうした鉄工所をカタヤと呼んだ。

(5) ミシン屋

旧忍町には足袋屋が専用用いるミシンを扱う店が多くあった。昭和時代初期に創業した店が十三軒程あったというが、昭和九年に大阪から福助足袋が行田に移転し、福助足袋の分業体制に地域の足袋業者が組み込まれる過程でミシンの需要が一層伸び、さらに第二次世界大戦後急速に需要のび、ミシン屋が急増した。当時のミシンはドイツ製の物を改良して使うことが多く、ミシンメーカー自体も大阪に本社を置くものが多かったため、ミシン屋の仕事の大半は修理や調整の仕事であった。修理などの注文に応じきれないミシン屋に対して、「ミシン屋さんかい神様かい、天皇陛下の親戚かい」などと揶揄することもあったという。

足袋業界の衰退とともに廃業や転業した業者が多く、現在では五軒のみが営業している。被服製造業の需要に対応すると同時に、足袋製造業者が使用しているミシンの修理や調整が仕事の割合の多くを占めており、現在の行田の足袋製造の継承のためには不可欠な存在である。

(6) 糸屋

ミシンに不可欠なのが糸である。第二次世界大戦後の統制が解けた頃に糸の需要も急増して、昭和二五〜三〇年頃が糸の売り上げのピークで、それまで擦糸製造を行っていた業者も販売業に転じていったという。現在は足袋製造業をはじめ、スリッパ製造、学生服などの被服製造、車のシートなどの裁縫用の糸を手広く扱う商売になっているという。

(7) 甲馳屋

甲馳は足袋に不可欠な部材である。甲馳の全国的な産地は広島県と東京都下であった。それらの出張所が行田に設けられていて、駐在員が注文をとって歩いていた。また、地元で甲馳製造を始めた者もあつた。足袋製造の生成期には、業者によって搬入する甲馳の種類が決められていて、最上級のものは東京人形町の足袋屋用などといわれていた。昭和三二年頃から、行田市域での甲馳の販売競争が熾烈になつた。この頃から甲馳の販売を組合で行うようになった。それが後の日本こはぜ共同組合の設立につながつていった。甲馳は通年製造されていたが、足袋の製造が忙しくなる秋口から甲馳も増産体制に入つた。

(8) 箱屋

行田足袋の全国的な販路の拡大に応じて、梱包資材の需要が急速に高まり、出荷用の箱製造が始まつた。とくに商品が汚れることを防ぐため、白足袋の梱包についての研究が行われ、行田市域では足袋製造業者が箱屋を重用するようになった。運搬用の箱だけではなく、化粧箱を用いることで足袋に商品価値を付与することが考えられ、さまざまな化粧箱が考案された。この業種は、足袋業界が衰退してもその技術をいかして、他の商品の化粧箱や詰め合わせ用の箱などの製造に販路を拡げ、現在も行田における箱製造の伝統を継承している。

(9) 印刷屋

箱屋と同じような展開を示したのが印刷屋である。先述した三〇四軒の足袋製造業者の多くは複数の

商標の足袋を製造しており、その商品の区別を明確にするため、多様なラベルを創作することになった。十種類以上のラベルを使い分ける業者もあった。その仕事を担ったのが印刷屋で、さまざまな意匠を凝らしたラベルが製作された。この業種も、足袋業界が衰退したあとも転業した衣料品製造業や箱屋と連携しながら、今日も操業を続けている。

(10) 奈良漬屋

第二次世界大戦後、次々に再興した足袋製造業者は販路を全国に求めていった。ナイロン製の靴下が出現した当時も、東北地方や大都市での足袋の需要は根強く、各製造業者は競って販路の拡大と、顧客の確保に努めた。その手段として、顧客となった地方の商店などにお歳暮として重用したのが行田の名産として知られていた奈良漬であった。醸造業者が多かった行田市域では、地元で収穫されたウリを奈良漬にする商店が複数あり、足袋の販路の拡大に併せて行田の奈良漬も東北地方などへ販路を拡げていった。

(11) 畳屋

行田の足袋屋の店舗は、奥行きのある敷地の奥が倉庫や工場になっており、表の通りに面したところに家屋を兼ねた店舗が設けられていた。店舗として用いられていた空間は、畳敷きであった。畳は商談する際にも、足袋を試着する際にも接するもので、店舗に直接足袋を購入に来るお客に対して、畳は店のイメージを左右する大事な要素であった。そのために、店舗を持つ足袋屋から毎年秋口になると畳替

えの注文があつた。

(12) 大工

家大工の仕事も足袋製造業に密接に係つていた。第二次世界大戦後に足袋業界が再興すると、工場の新築や増築が相次いだ。また、工場に新たなマシンなどの機械類が導入されると、その都度建物内の造作に手を入れることになり、大工には絶えず足袋工場の手間仕事があつた。この手間仕事は工場だけでなく、内職をする家庭単位でも増えていった。内職用のマシンの設置のための造作、下請業者間の半製品の回収や配達を行うサイトリヤの配達用自転車のことを配慮した長屋のドブ板張りなど、足袋を製造したり売るために市域のあちらこちらで大工の需要があつた。

(13) 鳶職

家屋の建築に関わる大工、左官、鳶職を三職と呼ぶが、カシラと呼ばれる鳶職は足袋製造業とのかかわりが深い。マチトビと呼ばれる人たちのなかには、店抱えのカシラとなる者もあつた。足袋屋の旦那衆とのつきあいが深く、旦那衆の家の冠婚葬祭のほとんどを取り仕切つた。工場の新築等についての相談もカシラとの相談が最初で、その後の段取りはカシラに任せてすすめた。初午・お酉様などの行事に際しても、足袋屋の旦那衆にはカシラが付き添つた。当時は、行田の旦那衆は足袋屋が占めていたので、旦那の葬儀の手配などを含めて、町内のスポンサーでもあつた旦那衆の意向を受けて、カシラが取り仕切つていた。

十三の諸職の例について概要を紹介してきたが、このほかにも質屋が七〇余軒もあり、その質草が足袋であったなどという話も聞かれるほど、大正時代から昭和三十年代頃までの行田の街は足袋製造業を中心に地域社会が形成されていたのである。

さらに、もう少し巨視的にみれば、利根川・荒川流域に広大な農地を有する徳農家の存在もまた重要である。行田の足袋産業を急速に推しすすめる契機となったのは忍商業銀行と行田電燈会社の設立であった。これらの実現のために、資産家として徳農家が果たした役割を看過することはできないであろう。

このように、行田市域では足袋製造業を核として、さまざまな職種に関わる人びとの間で緊密な関係が形成されていたのである。

また、行田の足袋産業の展開を考える際に足袋業界に対する外圧の存在にも注目しなければならない。昭和初期になると行田足袋業界では労使の対立が激化し、足袋会社の不況対策としての職工賃金の値下げに反対し待遇改善を要求した職工によるストライキが相次いだ。行田足袋業界にとって内圧というべきこの足袋争議は昭和十年頃に両者の交渉がすすむようになったが、その間に、行田足袋業界にとって国内最大の競争相手であった大阪の福助足袋が行田進出を果たすことになるや、その外圧により労意対立の軸心自体が揺らいでいくことになり、行田足袋業界の団結を確固としたものにしていったのである。

おわりに

行田の足袋製造業の事例のように、家産や農地などの人が何世代にもわたって関わってきた文化事象は、その成り立ちや移り変わりを理解しようとする、主体となる人物像なり社会というものが適及的に想定できるため、ある程度の実感をもってそれらについて理解を深めることができる。

しかし、家産や家業というものが日常的ななりわいに直結しない現在の生産活動は、日常生活のうえでは合理的である一方で、主体となる人びとや地域社会との関わりという点では利那的で連続性や恒常性の低いものである。今後の生業研究はこうした事象をも対象にしてすすめていかなければならない。

また、行田の足袋産業の推移を考える際に、日本政府が高度経済成長という経済の急転換を企図した時期に、足袋製造業は産業としての役割を終えたことにも留意しなければならない。和装との組み合わせで用いられた足袋は、高度経済成長の進展にともなう日常生活における洋装の一般化によって市場を失っていった。その過程で業界自体がなぜ他の産業に転換していくことを模索できなかったのかということ、グローバル化の進展が従来の産業構造を大きく転換させつつある今日の日本の状況下においてこそ、再検証する意味があるのではないだろうか。

高度経済成長期とその後のグローバル化の急速な展開を経て、現在の私たちの日常生活は推移してい

るが、私たちはその都度どのような基準でどのような選択をしてきたのか、断続的に展開される日常生活はあまりにも自明なものとして捉えられて、そのようなことを自問することなく日々の暮らしを送ってきてしまったのではないだろうか。こうした確認を行うためにも直近の過去とのつながりを捉えなおそうとし続ける民俗学の視点は有用である。

註

- (1) このことを指摘した嘯矢は、小島栄一「北埼玉地王の足袋製造業『国民経済雑誌』(第36巻5・6号・第37巻1号)一九二四年である。本稿を作成するにあたり、大沢俊吉『行田足袋工業百年の歩み』行田足袋商工協同組合発行一九七一年に資料篇(第三)として収録されたものを利用した。
- (2) 行田市史編さん委員会編『行田市史 資料編 近代2』行田市 二〇〇九年八四頁。
- (3) 前掲書(2) 八〇頁。
- (4) 前掲書(2) 一〇〇頁。
- (5) 前掲書(2) 四一〇頁。
- (6) 前掲書(2) 四一一頁。
- (7) 前掲書(2) 六七五頁。
- (8) 前掲書(2) 六七八頁。
- (9) 次表は、行田の足袋製造業がそのピークを迎えつつあった時期の行田で製造された足袋の商標および足袋業者一覧である。多くの製造業者は複数商標による足袋製造を試みており、行田市および同業者三〇四が、主要商標三〇四に加えて二四六の異なる商標による足袋製造を展開していた。

昭和29年頃の商標と足袋製造業者

(出典：行田足袋商工協同組合編発行『行田地方の足袋被服商標名簿』1954年)

	商標名	その他の 使用商標	(昭和29年当時の) 会社名	(昭和29年当時の) 住所	(昭和29年当時の) 代表者
ア	アジア	龍宮 うれっ子	荒井興業株式会社	行田市 佐間	社長 荒木久一郎
	艶姿	江戸ッ子 はなぶさ 金天狗 ほがらか 銀天狗 おとずれ	日東足袋有限会社	行田市 長野	社長 関田英一
	揚巻	月姫	揚巻足袋株式会社	行田市 成田町	社長 小林定一
	東桜		有限会社小坂谷商店	行田市 大手町	社長 小坂谷卓三
	東港		新久商店	行田市 内行田	代表者 新井久藏
	アサヒフタバ	誠忠 和歌姫	山口足袋工業有限会社	羽生町 上羽生131	社長 山口宇平
	東一	あづまいち	大川広吉商店	行田市 旭町	代表 大川広吉
	安全	三ッ菊	千代田善次郎商店	行田市 下忍	社長 千代田善次郎
	浅妻	薄雪	浅妻足袋野中商店	行田市 内行田	代表 野中房吉
	荒木		木元喜代一商店	行田市 荒木	社長 木元喜代一
	東金時		宮崎商店	行田市 内行田	代表 宮崎照正
	あこがれ	憧	惺足袋有限会社	行田市 矢場	代表 大村忠寿
イ	イサミ	人気東踊	イサミ足袋有限会社	行田市 向町	社長 鈴木栄一
	イサミ印	魁印	イサミ足袋株式会社衣料部	行田市 旭町	同上
	いちまる	仲好 宝玉 二葉 獅龍	株式会社本山商店	行田市 内行田	社長 本山博久
	いきな	ホームラン エーワン	大井縫製株式会社	行田市 新町	社長 大井松藏
	一心	武士つばめ	株式会社中島商店	行田市 長野	社長 中島房次郎
	いそ干鳥	努力	磯四郎商店	行田市 宮本町	
	いきおい		茂木正藏商店	行田市 下町	
ウ	雲龍		大谷昌布商店	行田市 元町	
エ	鯛漁エビス	暁 山花	エビス足袋株式会社	行田市 天満	社長 佐藤孝太郎
	栄冠	進級 大鳥	栄冠被服有限会社	行田市 新町	社長 奥貫賢一
	永徳	尊徳 たぬき	永徳足袋株式会社	吹上町	社長 根岸三四
	栄楽	金ふくべ	栄楽足袋製造本舗	行田市 旭町	代表 清水照義

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

	栄光		半田被服有限会社	行田市 内行田	社長 半田源次郎
	延壽		延壽足袋田代英助商店	行田市 下町	
	ゑびすや		ゑびすや商店	行田市 新町	代表者 川島忠次
オ	折鶴	おかめ 三福	折鶴足袋有限会社	行田市 荒井田町	社長 小橋常三
	御都女	福緑寿	加藤弥之輔商店	行田市 宮本町	
	王将		王将足袋株式会社	行田市 新町	王将足袋株式会社
	十八番	両関 爛漫	株式会社小澤商店	羽生町 新郷	社長 小沢隆一
	乙姫	大光 姫龍	岡村倉太郎商店	行田市 八幡町	
	大入	江戸姿	岡村倉太郎商店	行田市 諏訪町	社長 岡村倉太郎
	王将		王将足袋株式会社	行田市 新町	社長 小暮芳太郎
	老松	共立	老松足袋株式会社	行田市 天満	社長 池田正治
	大町		新井足袋被服加工所	行田市 大町	代表 新井吉三
	大山	占領	大山幸造	行田市 下忍	社長 大山幸造
	翁		高畑茂吉商店	行田市 二天満	社長 高畑茂吉
	オシドリ		小林被服	行田市 宮本町	代表 小林春二
	親子キリン		キリン足袋株式会社	行田市 八幡町	社長 堀越清次郎
	鬼若		渡辺合名会社	羽生町 上羽生	社長 渡辺三郎
カ	楽屋	万來 日の出鶴	楽屋足袋株式会社	行田市 佐間	社長 小池甚太郎
	賀茂鶴	宝賀茂鶴 銀賀茂鶴	株式会社熊井商店	行田市 旭町	社長 熊井軍平
	かねと	金扇 開運 末広大黒 新光	新郷足袋株式会社	羽生町 新郷	社長 渡辺恵以
	かるた	櫻都 融和	かるた足袋有限会社	行田市 北谷	社長 時田周三
	かねまつ		秋山治助商店	行田市 本町	
	かもみ	手古舞 かもみ金 かもみ銀 かもみ銅	鈴木善太郎商店	行田市 新町	社長 鈴木善太郎
	カルワザ		カルワザ足袋株式会社	行田市 下忍	社長 新恵一郎
	亀の子	金亀 満亀鶴	有限会社本山正三商店	行田市 内行田	
	かまや	かど松	細井商店	行田市 旭町	代表 細井克祐
	天		大竹商店	行田市 本町	社長 大竹正三郎
	かなめ	要	有限会社武藤商店	行田市 大手町	社長 武藤作蔵
	重	かねしげ	大関重太郎商店	行田市 下忍	

	歌舞伎好		有限会社廣田屋商店	行田市 内行田	代表 関根一男
キ	金盃	盃、銀盃 銅盃 木盃 揚げ日の旗	株式会社松本次郎吉商店	行田市 旭町	社長 松本近太郎
	金満	金満金 金満銀 金満福 東海	吹上工業株式会社	吹上町	社長 田沼年治
	金婚		金婚足袋有限会社	行田市 長野	社長 増田長太郎
	金鈴	銀鈴	金鈴工業株式會社	行田市 下屋区	社長 田中茂八
	金菱	銀菱 初音 紅菱	金菱足袋株式会社	行田市 長野	社長 市川芳平
	金楽	神楽 樂天	金樂足袋株式会社	行田市 天満	社長 寺本一郎
	金角		金角足袋有限会社	行田市 長野	社長 角倉清三
	金線		金線足袋有限会社	行田市 成田町	社長 金田正雄
	金だるま	富士龍	有限会社武藤包治商店	行田市 荒井田町	
	金言	心優	有限会社小川商店	行田市 荒井田町	代表 小川作藏
	東一金大黒		金子徳右エ門商店	行田市 二天満	社長 金子徳右エ門
	金栄		金榮足袋有限会社	行田市 矢場	社長 林生三
	金兜		有限会社大澤孝太郎商店	行田市 内行田	
	金城		有限会社神田商店	行田市 北谷	代表 神田正吉
	金庫		金庫足袋森田計一商店	吹上町	
	金獅子		金獅子足袋被服有限會社	行田市 向町	代表 内田富雄
	金聯	銀聯	堀口辰三郎商店	行田市 諏訪町	
	金桜		矢内慶一商店	行田市 下町	代表 矢内慶一
	金芝		金芝足袋小河原商店	行田市 下忍樋上	代表 小河原平太郎
	金鯛		久保田清平商店	行田市 下町	
	金蜂		金蜂足袋製造本舗	行田市 向町	代表 岡戸幸雄
	金将		金将足袋有限会社	行田市 旭町	代表 坂野弘
	勤王	世界一忠勤 尊王 繁榮 勉強 国華 公益 積善	小島株式会社	羽生町 上羽生	社長 小島完吉
	きねや		中澤足袋有限會社	行田市 北谷	代表 中沢武雄
	きくわ		株式會社田代鐘助商店	行田市 新町	
	菊壽		菊壽足袋古野商店	行田市 旭町	代表 吉野誠一
	協力		有限会社石川商店	行田市 旭町	社長 石川降太郎
	銀座		銀座足袋有限會社	行田市 新町	社長 風間安雄

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

	釜屋キング		釜屋衣料株式会社	行田市 新町	社長 木村寿一郎
	菊菱	織姫	菊菱足袋有限会社	行田市 向町	社長 蓮見安太郎
	共楽		共楽足袋被服製造本舗	行田市 諏訪町	井田昌弘商店
	清姫		清姫足袋有限会社	行田市 天満	代表 松岡清吉
	未確認	きのえね	有限会社高崎屋商店	行田市 八幡町	代表 遠藤甲子太郎
ク	軍配		横井清次郎商店	行田市 北谷	社長 横井清次郎
	国市		国市 足袋有限会社	行田市 宮本町	社長 国島市太郎
	くまで	フジタカ	松井常吉商店	行田市 向町	
ケ	KK朝日	ミクニ ほまれ 桃太郎	株式会社小池庫吉商店	行田市 佐間	
	源平	七草	源平足袋株式会社	行田市 北谷	社長 牧野吉蔵
	鶏馨	東光 満里姫	橋本健吉商店	行田市 長野	社長 橋本健吉
	健康		株式会社吉田鑛平商店	行田市 長野田幡	
	結構		山本常次郎商店	行田市 佐間	
コ	五葉	おなじみ	有限会社清水商店	行田市 長野	社長 清水浅之助
	互福	金宝	万福足袋衣料株式会社	羽生町 上新郷	社長 青未泰助
	金春	あざみ	有限会社あざみ商店	行田市 本町	社長 松本卓
	黒龍		埼玉繊維工業株式会社	羽生町 羽生4125	社長 堀口謹一
	孝子		有限会社大木商店	行田市 新町	社長 大木末吉
	交通		野口茂男商店	行田市 長野	社長 野口茂男
	金剛	光金剛 金剛地下タビ	小林伊吉商店	行田市 成田町	
	国冠		国冠足袋株式会社	行田市 長野	社長 古沢新治
	小づち	誉菊水	関根常三郎商店	行田市 旭町	社長 関根常三郎
	駒奴		小池四郎商店	行田市 佐間	社長 小池四郎
	好永		好永足袋大屋忠三郎商店	行田市 佐間	
	光星		木村好璋商店	行田市 宮本町	
サ	山海	七五三娘 菊娘 将軍 健民 高評 満州野	山海足袋株式会社	行田市 下町	社長 久積倉助
	三勝	三勝 おこのみ	三勝足袋合名会社	行田市 内行田	社長 加村喜三
	桜大閤		大丸被服株式会社	羽生町 駅前通り	社長 倉林春男
	サンエス		牧田三次商店	行田市 内行田	
	五月富士		青木勝郎商店	行田市 佐間	

	三番叟		江森半六商店	行田市 長野	
シ	正直		正直足袋株式会社	羽生町 土羽生	社長 藤村栄一
	蛇の目	宝球 黒船 花ダルマ	島吉衣料株式会社	羽生町 上新郷	社長 島村圭一
	獅子舞		獅子舞足袋有限会社	行田市 宮本町	代表 丸山保平
	祝盃	伊達姿	祝盃足袋竹井英一商店	行田市 向町	
	新和		株式会社新田屋商店	行田市 下町	社長 津久井和吉
	出世		出世足袋森伴造商店	行田市 下町	
	祥鶴		祥鶴足袋五十嵐商店	行田市 長野	代表 五十嵐桂太郎
	松月		松月足袋有限会社	行田市 下屋区	代表 吉野福藏
	勝盃		有限会社松本三吉商店	行田市 成田町	
	親善		親善足袋高橋半七商店	行田市 宮本町	
	十万石		田中徳之輔商店	行田市 佐間	
	十二支		小川清治商店	行田市 新井田町	
ス	末広	歓迎 美人	末廣足袋有限会社	行田市 元町	社長 根岸武一
セ	盛大		盛大足袋株式会社	行田市 長野	代表 吉関金次郎
	干壽	花江戸 美松 天壽 式部	壽産業株式会社	行田市 宮本町	社長 島村清三郎
ソ	総理		総理被服工業株式会社	羽生町 塚原	社長 加藤義七
タ	高砂	雪笹 天満 花咲	株式会社柴田商店	行田市 天満	社長 柴田常治
	大成	福笑	河野吉平商店	行田市 下忍	社長 河野吉平
	丹頂		岡戸光雄商店	行田市 向町	代表 岡戸光雄
	太陽		高橋三郎商店	行田市 北谷	社長 高橋三郎
	大仙		瀧田仙次郎商店	行田市 長野	
	泰平		泰平足袋株式会社	行田市 長野	社長 小堀庄藏
	太平		太平工業株式会社	羽生町 上羽生	社長 島崎伸藏
	鯛印		有限会社権田商店	行田市 宮本町	代表 権田信治
	まるきん宝		富士宝富士足袋株式会社	行田市 下町	社長 大山善作
	大昌		大昌足袋株式会社	行田市 佐間	社長 沢田重五郎
	未確認	象大	有限会社町田商店	行田市 新町	社長 町田竹之助
	大名		有限会社岡部商店	行田市 新町	代表 岡部保藏
	宝あさひ	光東邦	井桁首次郎商店	行田市 佐間	
	大盃		大盃足袋本舗	行田市 成田町	大村勇商店
	大興	淡路跡	有限会社田中商店	行田市 成田町	代表 藤本行信
	大宝		大宝足袋株式会社	行田市 北谷	社長 相上惣吉

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

	宝丸石	宝	石崎留吉商店	行田市 向町	
	宝大黒		有限会社内山商店	行田市 下町	社長 内山貞二
	宝富士		大山善作商店	行田市 下忍	
	竹馬		山口良太郎商店	行田市 持田	
	達人		岡村万治商店	行田市 大町	
チ	蝶輪	牛車 チョーワカパー	株式会社島澤藏吉商店	行田市 長野	代表 島澤辰雄
	チカラ	笑顔	井形商店	行田市 大町	代表 井形紘治
ツ	司	つかさ キンカイ	株式会社司商店	行田市 旭町	代表 松村芳浩
	月兎	芻	鎗田多市商店	行田市 荒木	
テ	天龍	花道 天龍金 天龍銀 天龍銅	加藤進商店	行田市 矢場	社長 加藤進
	鉄仙	ふた子仙印	鉄仙足袋有限会社	行田市 向町	社長 青柳慶之助
	天下一	満天下	小林甲一商店	羽生町	
	天爛	孔雀	関口弥助商店	行田市 成田町	
	てまり		大木昌次郎商店	羽生町 上新郷	
	照姫		有限会社田中照三商店	行田市 大町	
	天地悠久	悠久	悠久足袋被服株式会社	行田市 宮本町	社長 山田重郎
ト	道風	青柳、常盤 家福、藤娘 実盆道風 富士日本	青柳合資会社	行田市 本町	社長 青柳嘉助
	鳥居		鳥居清太郎商店	行田市 向町	
	徳力		横山徳次郎商店	行田市 二天満	代表 横山徳太郎
	東都		代茂三郎商店	行田市 大町	
	突貫	ダイヤ	石崎商店	行田市 成田町	代表 石崎銀之助
ナ					
ニ	仁徳	愛嬌、 日本橋 江戸之華 剛久、新名 信愛、名峰 新進、三楽	仁徳足袋株式会社	行田市 天満	社長 鈴木新太郎
	仁田	福泉	仁田足袋有限会社	行田市 天満	社長 佐藤武造
	日光		島村工業株式会社	北埼玉郡 新郷	社長 島村利根太郎
	日東		日東工業株式会社	行田市 宮本町	
	錦		株式会社杉下商店	羽生町	

ヌ	ぬく女	静	澤田馨次商店	行田市 埼玉	社長 沢田馨次
ネ					
ハ	旗印		有限会社栗原代八商店	行田市 本町	
	花形	福娘 光富士 富士スター	有限会社大澤専蔵商店	行田市 新町	社長 大沢精一郎
	八光	やまびこ	有限会社八光足袋本舗	行田市 長野	社長 北岡福次郎
	初日	舞娘	舞原被服工業有限会社	行田市 旭町	社長 舞原長治
	初夢	白鳩	高橋工業有限会社	羽生町 4174	社長 高橋保次郎
	白鷹		日東工業有限会社	行田市 宮本町	社長 大和田幸造
	梅鶯		金子芳郎商店	行田市 下忍	代表 金子芳郎
	萬國	優馬	萬國足袋株式会社		代表 須郷専一郎
	坂東		荒木十司商店	行田市 宮本町	社長 荒木十司
	花ぶひす		株式会社鈴木榮商店	行田市 下忍区	
	花鶴		有限会社内田友三商店	行田市 北谷	
	万宝		大澤萬一商店	行田市 宮本町	
	ハキヨイーナ		細村宗助商店	行田市 天満	
	花姫	縫付地下タピ カネオ	奥抜商店	行田市 荒井田	代表 奥抜辰夫
	花園		竹越商店	行田市 諏訪町	代表 竹越昌三郎
	晴菊		島村口豊商店	行田市 内行田	
	花龍		花龍足袋小林三作商店	行田市 内行田	
	白羊		前田正之助商店	行田市 長野	
ヒ	日の本	的 美強	日の本足袋KK行田工場	行田市 向町	工場長 田中哲馬
	姫松	恵徳 功名	姫松足袋有限会社	行田市 天満	社長 森田逸雄
	秀菊		小池秀雄商店	行田市 下忍区	
	日の下		有限会社夏目商店	行田市 荒井田町	社長 夏目重吉
	日の出キリン		キリン足袋有限会社	羽生町 羽生	社長 山崎栄一
	日の出		日の出足袋被服有限会社	行田市 長野	社長 飯野恵太郎
フ	福助	家庭 福運 万歳 宝船 おつとめ	福助足袋KK行田工場	行田市 北谷	代表者 亀山慶三
	福祿寿	御都女 未確認	有限会社加藤弥之輔商店	行田市 宮本町	
	福利	増進	株式会社岩崎久商店	行田市 宮本町	
	文明		株式会社藤間商店	羽生町 羽生	社長 藤間春一
	富国		有限会社中田商店	羽生町 上羽生	社長 中田徳藏

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

	福力	双福	栗原正一商店	行田市 天満	社長 栗原正一
	富士羽衣		富士羽衣足袋株式会社	行田市 二天満	社長 西岡亀二
	福保		福澤浅吉商店	行田市 宮本町	社長 福沢浅吉
	福和		大河原庫造商店	行田市 持田	社長 大河原庫三
	福大黒	常春	蒲地正雄商店	行田市 八幡町	代表 蒲地正雄
	福壽恵 (福末)	君子 飛龍 お多福	株式会社今井商店	行田市 北谷	社長 今井末藏
	福一	福一 カバー	細谷好三商店	行田市 佐間	代表 細谷好三
	富士星	祝当選	津久井敏勝商店	行田市 諏訪町	社長 津久井敏勝
	福星		金子薔美商店	吹上町	
	藤網		今井春之助商店	行田市 下忍	
	福榮		福榮足袋有限会社	行田市 北谷	代表 片柳真五郎
	福無双	愛染	中澤勝秋商店	行田市 天満	
	福光		関増次商店	行田市 宮本町	代表 関増次
	福満	六津三	北岡松太郎商店	行田市 長野	
	福重		福重足袋有限会社	行田市 佐間	代表 渡辺重治
	福猫	道灌	太田繁治商店	行田市 宮本町	代表 太田繁治
	富士盛		大澤久義商店	行田市 下町	
	福德	あたり	小川好司商店	吹上町	
	フタバ	和歌姫 誠忠	山口足袋工業有限会社	羽生町	
	福満	六津ミ	北岡松太郎商店	行田市 長野	
	武州		有限会社清水商店	行田市 長野	社長 清水浅之助
ハ	辨慶	千客	丸香商店	行田市 荒井田町	代表 奥抜香太郎
	辨天		福辨天足袋有限会社	行田市 長野	社長 北岡宗太郎
ホ	徳国	忍城	株式会社荒井八郎商店	行田市 佐間	
	ほうらい	共栄 春風	ほうらい足袋卸買有限会社	行田市 新町	社長 奥抜賢一
	豊年	豊年鶴 豊年亀	株式会社小沼商店	行田市 向町	代表 小沼源兵衛
	宝山	深山	宝山足袋株式会社	行田市 旭町	社長 島崎武雄
	宝泉	日月	宝泉足袋株式会社	行田市 下忍	社長 桜井清次
	宝庫		宮崎利夫商店	羽生町 上羽生	代表 宮崎利夫
	本丸		株式会社本藤商店	行田市 天満	社長 本藤英太
	北光		北光足袋本舗	北埼玉郡 新郷	代表 梶田重夫
	宝幸		宝幸足袋有限会社	行田市 宮本町	社長 上野行男
	無敵®		松岡英雄商店	行田市 北谷	

	鶯鶴		鶯鶴足袋被服本舗	行田市 内行田	代表 国島光太郎
	宝國	福壽 完全	井桁小一商店	行田市 佐間	
	宝生		会田慶治商店	行田市 新井田町	
マ	満足		満足足袋株式会社	加須市 加須	社長 中田延藏
	㊤	敷島 鼓 千里 香梅	マルヘイ足袋株式会社	行田市 旭町	社長 田代清之助
	未確認		株式会社杉下商店	羽生町 上羽生	社長 杉下晃治
	まるしん	㊥印正力	島崎商店	行田市 天満	社長 島崎進弘
	東京	マルエイ	瀧田商店	行田市 内行田	代表 瀧田永
	㊦		株式会社岡戸商店	羽生町 上羽生	社長 岡戸好雄
	㊧		株式会社荻原商店	羽生町 上羽生	社長 荻原善右ヱ門
	舞扇		根岸吉一郎商店	吹上町	
	萬宝	宝王様	萬寶足袋有限会社	行田市 宮本町	社長 大沢万一
	㊨		福壽被服工業株式会社	羽生町 土羽生	社長 諸貫元吉
	㊩	まるそう	小澤社介商店	行田市 本町	
	まとい		有限会社内山商店	行田市 下町	
	松緑		株式会社秋山商店	行田市 本町	社長 秋山金右ヱ門
	未確認		ムサン産業有限会社	行田市 宮本町	社長 栗原勘藏
	㊪		丸三衣料有限会社	羽生町 駅前通り	代表 小林達司
	㊫		高橋茂商店	行田市 宮本町	代表 高橋茂
	㊬		今泉衣料合名会社	行田市 宮本町	代表 今泉勝生
	㊭		上原被服有限会社	行田市 旭町	社長 上原金次郎
	丸起		株式会社篠原商店	行田市 長野	代表 篠原治雄
	丸屋		柳仙吉商店	吹上町	
	まるは		林商店	行田市 下忍区	林善一
	丸鶴		五十幡商店	行田市 長野	社長 五十幡明日吉
	萬福		須田好治商店	行田市 向町	代表 須田好治
	㊮	マルタ	田島雅次商店	吹上町	
	マルハシ		橋本信三商店	行田市 長野	
	未確認		有限会社大澤艶吉商店	行田市 下町	
	㊯		石崎留吉商店	行田市 向町	
ミ	ミツワ富士		有限会社兼松商店	行田市 宮本町	社長 兼松宗六
	みちづれ	胡蝶	みちづれ足袋株式会社	行田市 旭町	社長 中村善七
	ミコト	初鳥	ミコト足袋株式会社	行田市 旭町	社長 飯島年明
	美奴	みやこ	みやこ足袋株式会社	行田市 天満	社長 小林辰雄
	民族		株式会社田辺商店	羽生町 上羽生	社長 田辺敏郎

埼玉県行田市における足袋産業の展開とその背景

	瑞穂		みずほ足袋小池正次商店	行田市 天満	
	三津だるま		だるま足袋被服株式会社	行田市 長野	社長 泉正七
	三ツ面		三ツ直足袋株式会社	行田市 長野	社長 松本次郎
	民福		民福足袋有限会社	行田市 下忍区	社長 半田雄五郎
	光星		木村好璋商店	行田市 宮本町	
	光鶴		赤羽足袋有限会社	行田市 矢場	代表 赤羽栄次郎
	三好		市川昌平商店	行田市 八幡町	
	ミツワ	福王 鬼王	ミツワ足袋株式会社	行田市 向町	代表 川崎計一
ム	ムサシ	六助 登城	長谷川商店	行田市 矢場	社長 長谷川清治
	紫式部	紫	株式会社荻原商店	羽生町 上羽生	社長 荻原善右エ門
メ	名馬	伯楽	株式会社磯部商店	行田市 持田	社長 磯部喜恵二
	夫婦鶴		曙被服有限会社	行田市 成田町	社長 岡野喜久
モ	桃山	恵方	桃山足袋商店	行田市 行田駅前	代表 松本栄一
ヤ	奴	紅梅 七福町奴 江戸奴	奴足袋本舗	行田市 長野	社長 橋本与三郎
	山吹	やまだい 千歳	山吹足袋株式会社	行田市 旭町	社長 小林利八
	野球		株式会社武藤商店	加須市 礼羽	社長 武藤恵一
	大和さくら		大和田商店	行田市 大手町	代表 大和田金藏
	八雲		中村為三郎商店	行田市 内行田	
	八代恵		中島六郎商店	吹上町	
	未確認		牧禎商店	行田市 北谷	社長 牧野貞藏
	やしま	ラッキー カバー	小川勇次郎商店	行田市 元町	
	ヤマス		有限会社菅波商店	行田市 工北谷	社長 菅波義浩
ユ	豊		豊足袋有限会社	行田市 佐間	代表 瀬山由太郎
	有力		有限会社島村商店	行田市 長野	社長 島村泰造
ヨ	義家		田口喜助商店	行田市 下町	
ラ	ライオン	金熊 花菱 巴 イカダ	橋喜足袋製造有限会社	行田市 本町	社長 橋本喜助
	雷電	上越	大和足袋製造有限会社	吹上町	社長 中村覚助
リ	力弥	令鶴 令亀	有限会社牧野本店	行田市 本町	社長 牧野弥藏
	両徳	やまよ	橋本要藏商店	行田市 長野	代表 橋本要藏
	理想	一力	根岸徳二商店	行田市 下町	代表 根岸徳二
	立身	福丞	松岡松男商店	行田市 宮本町	社長 松岡松男
	両花	駒形	西田太郎商店	行田市 下忍	代表 西田太郎

ル					
レ	レート	元気	関根民八商店	行田市 向町	代表 関根栄三
	㊦	レコード	中田被服工業有限公司	行田市 大町	社長 中田博通
ロ					
ワ	若葉		若葉足袋有限公司	行田市 下忍区	代表 吉田弘
ン					
計	304	246	304	行田市 261 羽生町 32 吹上町 9 加須市 2	

付記

小稿は、成城大学平成十九年度・二〇年度特別研究助成研究「グローバル化に対応した地域社会・文化の継承と再構築に関する研究―実証と理論の両側面から―」（研究代表・上杉富之）の成果の一部である。

なお、小稿を成すにあたり、行田市史編さん委員会には資料の提供ならびに現地調査の機会を提供していただいた。記して御礼を申しあげる。